

Ⅱ 果 樹

本年の冬は平年より暖かく積雪も少ない傾向で経過している。1か月予報でも3月は気温が高くなると予想されており、生育進度は早まることが想定される。せん定作業を計画的に進めて、その後の春作業が遅れないように留意する。特に、休眠期防除は時期を逃さず適期に実施する。

また、おうとう等は発芽期を過ぎると凍霜害の危険性が急速に高まることから、燃焼資材は発芽期までに必ず準備する。

1 整枝せん定

(1) 樹勢と花芽着生に応じた整枝せん定

りんご（ふじ）の花芽分化率は概ね平年並であるが、地域での差が大きく、花芽不良のところも一部見られる。花芽の着生を充分観察し、花芽の少ない園地では充実した結果枝をやや多めに残すようなせん定を行う。

西洋なしの花芽分化率は、ほぼ平年並と見込まれる。りんごと同様に花芽の状況を見ながら、充実した花芽を残すようにする。また、花芽が多く樹間が狭く混み合っている園地では、計画的な間伐・縮伐を進める。

おうとうの花芽数は、平年並～多い傾向が見られる。せん定では、上部の主枝をコンパクトにし、下枝に日光が十分当るよう心がける。また、若木では花芽を早期に確保するため、切り過ぎに注意し、結果枝を多めに残すようにする。

なお、「紅秀峰」では樹勢を強めに維持することが大切であるため、基部から発出したやや強めの徒長枝も利用しながら、結果枝の更新を早めに行う。

(2) 切り口の保護

せん定後、直径3～5cm以上の大きな切り口に癒合剤を塗布し、枯れ込みや腐らん病等の枝幹病害の感染を防止する。

(3) 雪害を受けた園地の早急なせん定

雪害を受けた園地でせん定未実施の場合は被害程度に応じた対応を早急に行う。被害が軽い場合は被害部を結束して固定し、重い場合はきれいに切り落とし切断面には塗布剤を塗って保護する。

2 休眠期防除と耕種的防除の実施

(1) 休眠期防除

せん定終了後は速やかに枝の後かたづけを行い、休眠期防除は時期を逃さず適期に実施する。特に、もも縮葉病は、この時期を逃すと防除が困難となるので発芽前に実施する。

(2) 耕種的防除の実施

せん定の際に胴枯病・輪紋病・腐らん病等の枝幹病害がみられた場合は、削り取りやせん除など耕種的防除を行い、病害の拡大を阻止する。また、ハダニ等の密度を低下させるため粗皮けずりを行い、古い縄等は焼却処分する。

また、ぶどうでは、巻ヒゲおよび結果母枝の枯死部分は晩腐病の発生源ともなるので除去する。

3 降雪時の対策

春先は重く湿った降雪が懸念される。急な降雪時には、枝折れや樹幹損傷を防ぐため、早めに樹幹上の除雪を行う。また、ハウスでは施設の倒壊等につながることはないよう、屋根や施設周辺の除雪と消雪対策を早めに行う。

4 凍霜害の防止

果樹の生育ステージ別の低温に対する抵抗性は、発芽期頃から徐々に弱まり、満開期の頃が最も霜に弱くなる傾向がみられる。おうとうの場合は、発芽1週間後以降は -5°C 、発芽10日後以降は -3°C 程度の気温で被害が大きくなり、開花直前では -1°C でも3時間以上になると霜害を受けるようになる。このため、発芽期までには必ず燃焼資材を確保し、早めに設置する。

各種燃焼資材の特性

(平成15年 山形園試)

資材名	着火性	燃焼性	発煙性	安全性	燃焼時間	備考
霜キラー(縄+灯油)	○	○	△	△	140分(米ぬかロウ3kg)	低価格
防霜ロック	○	○	×	×	190分(灯油4.5ℓ)	発煙多
霜よけくん	○~△	△	○	○	160分	高価格
霜まもるくん	○	△	○	○	150分	高価格
霜取り名人	○~△	△	○	○	160分	高価格
霜よけなべっこ	○	○	○	○	300分	販売量少
シーダーフレーム	△~×	△	○~△	○	210分	高価格

5 摘芽・摘らい

摘芽・摘らい作業は、凍霜害の被害の有無や程度を把握したうえで進める。

おうとう「紅秀峰」は、結果過多による樹勢の衰弱や品質低下が起きやすいため、原則として摘芽を行う。摘芽の程度は、1花束状短果枝当たり2芽程度とする。ただし、必ず花芽(小花)の枯死程度を確認して行うこととし、花芽(小花)の枯死が多い園では摘芽の時期を発芽時期まで遅らせ、芽の動きを見て実施の有無や摘芽程度を調整する。

また、西洋なしの摘果の省力化や大玉生産を図るため、花芽着生に留意したうえで、発芽後10日頃から摘らいを実施する。

摘芽・摘らいを行った園地では、防霜対策を万全にする。